寧波（ニンポー）：日中国際交流原点の都市

福田　守利

Ⅰ．はじめに

筆者と中国浙江省寧波（ニンポー）市との関わり合いは1997年当時に台湾の上場企業の経営者である友人の招きで、同市経済特別地区に設立された彼の大陸の拠点を見学に行ったことがきっかけであった。その時は寧波が古代からの国際港であり日本との文化交流の歴史的な玄関口であったことなど知る由もなかった。成田から上海の浦東国際空港に飛び、市内の虹橋空港に移動し相当な時間待ちをしたあと30分程の飛行時間で杭州湾の反対側に位置する寧波空港に到着した。一日がかりの旅であったが、現在では寧波市から車で2時間程の杭州蕭山国際空港に成田から3時間で直行便が毎日就航しており、時間が短縮され便利になった。

一週間程滞在し、市当局の人々、地元財界人、台湾から進出している経営者の人々などとの交流を持った。その間、市内から30kmの東南方向にある「天童寺」を見学した際に、栄西禅師、道元禅師が留学僧として勉学修行に来ていた寺であり、特に日本の曹洞宗の開祖となった道元は4年間同寺で禅法を修業し悟りを開いた場所であることが解り、このような遠隔の地にはるばる日本から来た先人達の命懸けの労苦に想いが馳せ感慨が深かったことを覚えている。特に筆者は長く武道の「拳法」を学んでおり（拳法八段　協会理事長　法律研究で滞米留学中に計500名強の学生・社会人に拳法指導）拳禅一如など禅と武道との関係に興味を持っていたので、無事寧波訪問が終了し帰国してからは、俄然同市に対する興味が高まり歴史的な面からの調べを

してみる端緒となった。

Ⅱ．寧波大学と筆者との関係

1998 年に友人の企業の大陸進出 5 周年記念式典に招かれた時に、寧波大学の関係者を紹介される機会があり、その時に滞在中に専門分野（国際取引法、英米法）での講演を依頼された。「日米中の法律の比較」について 800 名の学生の前で質疑応答も含め英語で 2 時間の特別講義を行った。その時の経緯は、2001 年 11 月 1 日発行の第 17 号「神田外語大学報」に詳しく載っている。会場は熱気に溢れ、意欲的な学生が多いのに驚かされた。質疑応答の時は質問してくる英語の使い方のレベルの高さに感心した。当時中国では大学進学率が、9 ～ 10％前後と聞いていたため学生は選抜された人達であるということを肌で実感したのを覚えている。この特別講義は好評を博し、1999 年からは数多く講義に招かれ寧波大学の色々な先生方との交流を持つ機会を得た。

2001 年 3 月、筆者は招聘期間が無制限・終身である大学全体と、同時に外語学院（外国語学部）から二つの特別招聘客座教授の称号を厳陸光寧波大学学長と范誼外語学院院長から授与された[注1]。就任式にあたり筆者は「日本から遣唐使（けんとうし）、遣明使（けんみんし）、留学僧の時代から多くの先人達が寧波港を目指し入国し、この土地または、各地で学びました。このような千年以上にわたる同市とわが国の長い文化交流の歴史を考えると、千年経った今、私が寧波大学で客座教授として教鞭をとれることに感慨があります。」と述べさせていただいた。講義は日本語学科の学生とは日本語で、それ以外の学院（日本の大学の学部の意味）では英語で行っている。以下（原文）は、2003 年 3 月 10 日付けの外国語学院から石井米雄神田外語大学学長に送られてきた正式の報告書兼感謝状である[注2]。

注１：

聘　书

兹聘请福田守利先生为宁波大学兼职教授。

宁波大学

校长：

2001年3月

聘　書

特聘日本国神田外国語大学教授・法学博士福田守利先生為中国寧波大学外国語学院客座教授。

中国寧波大学外国語学院　院長
范誼（署名）
2001年3月5日

With great honor, I, dean of Faculty of Foreign Languages of Ningbo University of PRC, hereby engage as Guest Professor of the said faculty, Dr. Moritoshi Fukuda, professor of law, from Kanda University of International Studies of Japan.

Fan Yi (Signiture)
Dean, Faculty of Foreign Languages,
Ningbo University
People's Republic of China
Date: March 5, 2001

宁波大学外语学院

注２：

2003 年 3 月 10 日

神田外語大学学長　石井米雄　　殿

拝啓

陽春の候、ますますご健勝のことお喜び申し上げます。

さて、貴大学の福田守利教授が本学の客員教授として、いろいろな交流を行われ、1999 年から現在まで、数十回に渡って、本学で講座をお開きになりました。ここでご報告致します。（附表の如く）。

貴大学並びに福田教授に対して厚く御礼を申し上げます。これからも引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、切にお願い申し上げます。

敬具

中国・寧波大学・外国語学院

〒315211 浙江省寧波市寧鎮公路半路渡
TEL：86－574－87600430
FAX：86－574－87600321

福田守利教授近三年来寧波大学で行った講座一覧表

日　　付	テーマ	聴講者人数
2000 年５月８日	日本伝統文化	３０
2000 年６月 15 日	法律英語研究	１２０
2000 年９月 13 日	国際貿易	３５
2000 年 10 月 27 日	国際法	１００
2000 年 10 月 27 日	現代日本社会	６０
2001 年３月７日	著作権法	４０
2001 年５月 20 日	特許に関する法律	４０
2001 年９月 18 日	法律と日本経済	４０
2002 年２月 25 日	国際貿易規制及び慣例――１	１００
2002 年３月 21 日	国際貿易規制及び慣例――2	１２０
2002 年６月５日	知的産権	１４０
2002 年 10 月 14 日	中国とＷＴＯ	１１０
2002 年 12 月 18 日	ＷＴＯに関する法律	９０
2003 年３月 10 日	比較文化とビジネス	１１０

ここで、2012 年度のホームページに載った現在の寧波大学の概要をみてみよう。大学創立は 1986 年で、19 の学院（学部）を擁し、学生数は、学部生 25,000 名、大学院生 4000 名、社会人学生 15,400 名、留学生は世界の 30 ヶ国から 400 余名という公立総合大学である。教職員総数は 2371 名で、そのうち 1400 余名が教員数である。保有図書数は 331 万冊で、校舎の建築面積は 79 万平方メートル。日本語学科の学生数は学部生 540 名、大学院生 25 名であり日本への関心度も非常に高い。

次に学院（学部）を見てみよう。 1. 商学院 (Faculty of Business)、2. 法学院 (Faculty of Law)、3. 教育学院 (Faculty of Education)、4. 初等教育学院 (College of Elementary Education)、5. 体育学院 (Faculty of Physical Education)、6. 教養学院 (Faculty of Liberal Arts)、7. 外語学院 (Faculty of Foreign Languages)、8. 通信と技術学院 (Faculty of Communication and Arts)、9. 理学院 (Faculty of Science)、10. 工学院 (Faculty of Engineering)、11. 信息科学と工程学院 (Faculty of Information Science and Engineering)、12. 建築工程、土木工程と環境学院 (Faculty of Architectural Engineering, Civil Engineering and Environment)、13. 海運学院 (The Maritime Faculty)、14. 生命科学と生物工学院 (Faculty of Life Science and Biotechnology)、15. 医学院 (The Medical School)、16. 継続教育課程学院 (College of Continuing Education)、17. 科学技術学院 (College of Science and Technology)、18. 国際交流学院 (International College)、19. 材料化学と化学工程学院 (The Faculty of Materials and Chemical Engineering) 以上 19 の多岐にわたる学問分野を持った、寧波市と同様にこの 20 年余りで急成長を遂げている大学である。

Ⅲ．浙江省と寧波市

浙江省は、簡称が浙で、上海市、江蘇（こうそ）省に隣接する省で、四季があり温度

湿潤で最も気候的に恵まれているところである。旧石器時代からの遺跡があり、特に寧波市管轄下の余姚市郊外の河姆渡村の 7000 年前の新石器時代の原始集落の発見により稲作が行われていたことが確認された。春秋時代には呉越抗争の場であり、越の支配下に入りその都会稽（紹興）は長く栄えた。また隋の時代から大運河の終点である杭州が商業都市として発展した。その後、明の時代から浙江省の地図はあまり変わっていない。

ではここで現在の寧波市を見てみよう。中国の行政区分の中で都市のランクでは、まず直轄市として北京、上海、天津、重慶の 4 大都市がある。ランクは更に副省級市（省のような自主権を有する大都市）、そして省会市（省都）、地級市（省に所属する中規模都市）、県級市（県という行政区分を市制に発展させできた比較的小さい都市）の順になっている。寧波市は上記の、日本の政令指定都市にあたる大きな経済力を有する 15 の副省級市の中のひとつに入っている。人口は 564.6 万人、総面積 9,365km^2 で、2010 年には市の GDP は、3964 億元になり、寧波港は総貨物トン数が 4 億 1000 万トンに達し、コンテナ・ベースにすると中国の港の中では第 2 位、世界を含めると第 6 位という巨大な工業港湾都市となった。また、寧波市管轄の慈渓市から杭州湾を横断し対岸の嘉興市とを結ぶ全長 36km の杭州湾大橋は 2007 年に完成し 2008 年 5 月 1 日から開通し、上海市との距離も一段と近くなった。寧波市の発展は第二の上海として大きく注目されている。

寧波市は、この中国の東南部に位置するアジア最大の河川である揚子江（長江）下流の南側に広がる江南と呼ばれる肥沃なデルタ地帯にある浙江省の省都杭州市に次ぐ第 2 の都市で港町である。寧波は古代から海外との交易に関わった港湾都市として知られており、上海よりはるかに以前から存在していた歴史を持っている。寧波の発音記号は Ningbo であるが現地ではニンポーと呼ばれている。しかしニンボーと発音する人もおり、聞き方によっては po と bo の中間の音の様な気がするがこの原稿の中では一般的に使われて

いるニンポーを使うことにする。しかしこの町の最初の名称は、唐の玄宗皇帝の時代、西暦 738 年に紹興を中心とした越州の東半分の現在の寧波のあたりで交易活動が盛んになってきたため、独立させ「明州（めいしゅう）」という名称がつけられた。地域内に四明山があったのがその由来である。907 年に唐が滅亡し、明州は一時期杭州を都とした浙江省全域と江蘇省東南部を領する呉越国の支配下に入った。この独立国家呉越国は明州を拠点に日本との交易を盛んにしたが、宋が建国され呉越国は併合されたため、明州も宋が貿易港として統治した。宋の時代には明州は慶元府（けいげんふ）と呼ばれていた。その後、宋も南宋、北宋に分裂し、元が興り、1368 年の明の建国と歴史が目まぐるしく変遷していった。明の建国のあと 1381 年に太祖朱元璋がこの沿岸地方の海賊を平定したことを記念して「波寧（やす）らかなる海」という思いが込められて寧波の名称がこの港町につけられた。直接的には、国号「明」に重なるのをはばかったのも改称の理由だったらしい。以来今日まで 600 年以上この名前が正式名として使われている。慣習上、日本でも特に交易者間では日本読みの「ねいは」ではなくニンポーという呼び名が数百年にわたり使われていた。

寧波は昔からの略称を「甬（よう）」という。同市の中心部を流れる奉化（ほうか）江と余姚（よよう）江が合流しその地点から同市鎮海（ちんかい）区の河口を経て海につながっている川を甬（よう）江（こう）と呼ぶことからこの名称がある。この奉化江と余姚江が合流し甬江となる地点が三江口（さんこうこう）と呼ばれ、ここにある埠頭が寧波港の発祥の地である。つまり外海から鎮海の河口より 20km 遡った三江口までは水深が 5m 以上もあり川幅もゆったりしていたので、古代からの河川港として繁栄してきた。現在の寧波の国際港としての機能は海に面した鎮海区や北侖（ほくりん）区が中心である。従ってかつて日本からの遣唐使や遣明使が目指した明州は海港ではなく、河口より内陸に入った三江口のことを指し、彼らはこの港から中国大陸に上陸を果たし、華北を目指し出発して行ったのである。（以下明州は寧波を指す。）

明州が港として発展していった背景には、中国の運河交通がある。隋の

煬帝(ようだい)の時代の 610 年に完成した中国の南北を結ぶ大運河は、唐の時代には経済的に更に大きく利用されてきた。後に江南地方が発展してきても杭州より南部に運河を延ばすことは山があり地形上できなかったことと、錢塘(せんとう)江の土砂の堆積のため杭州湾が遠浅で船が入りにくいので、杭州の周辺で港として機能する数少ない港町である明州が注目を浴びたのである。甬江を遡り明州港で小型船に乗り換え、そこから余姚江を経て幾つかの川と小運河を利用するルートは杭州につながり、その先は、さらに大運河や河川を利用して河南省の開封(かいふう)の西で黄河に入りここから黄河を遡れば、歴代王朝の主都であった西安にまで到達することができたのである。

唐の時代の 999 年に貿易を監督する「市舶司」という役所が明州に設置されてからは、広州、泉州とともに中国沿岸交易の三大市舶港として大いにその存在が知られ発展していったのである。宋の時代には、南北の沿岸交易の中間点として特に南海貿易が盛んに行われ大いに繁栄した。明の時代にも日本人の対中国貿易の拠点として国際貿易港の役割をになった。

ここで、特に寧波と日本との関連性を検証してみよう。

Ⅳ．遣隋使、遣唐使と寧波

公式な日本と中国大陸の交流は隋の時代にまで遡ることができる。隋朝は中国を統一し、後に 1300 年にわたって中国で続いた官吏採用試験制度である「科挙制度」の導入や「大運河建設」を成し遂げたが、高句麗(こうくり)遠征で急速に国力が衰え、29 年の短命国家で終わってしまった。史料によれば遣隋使は聖徳太子が派遣した使節であるが、600 年には日本から使節が隋に来たと隋側だけの記録にあるのみであるが、607 年および 608 年に小野妹子(おののいもこ)が大使として、さらに 614 年に犬上御田鍬(いぬがみのみたすき)が大使として派遣されたことが日本側の記録に載っている（日本書紀）。遣隋使では、留学僧など学僧数十人からな

る使節を派遣し、仏教や隋の制度、学問、技術などを学ぶことを目的としたようだ。当時のルートとしては朝鮮半島西側に沿って進み、遼東（りょうとう）半島から山東（さんとう）半島に到達し、都である長安を目指した。第2代皇帝煬帝に小野妹子が謁見したことは世に知られている。遣隋使の時代の航海術や船の構造は東シナ海を横断する程の技術には至っていなかったので、以上の様なルートがとられたのである。従って本題である寧波との関連性はない。

次に遣唐使であるが、630年から894年に菅原道真の建議によって廃止されるまで264年間に20回計画派遣され、その中で4回が派遣中止されたという説が有力である。その目的は唐の法律、政治など社会制度と共に仏教や学問など文化の輸入であった。入唐ルートとしては北路と南路があった。前者は遣隋使のとったルートと同様に朝鮮半島西側に沿って北上し、山東半島経由で長安に行くルートであり、初期の頃はこの北路の往復ルートがとられた。後者は702年以降の使節がとったルートで、九州の博多や五島列島から東シナ海を横断し、この頃から一回の使節につき500名以上の人員が4隻の船に乗り組み渡るという方法がとられた。これが南路であるが、着岸地点は江蘇省から福建省に至る沿岸である。このルートには寧波（明州）が深く関わってくる。702年に粟田真人（あわたのまひと）が率いる第8回遣唐使節団は東シナ海を渡り、江蘇省塩城（えんじょう）県に着岸後南に下り、史上初めて明州に上陸したといわれている。

明州はこのように1300年前から古代の日本と中国を結ぶ重要な玄関口となり、中期末期の遣唐使船の入港や、その後の日中の文化交流の原点となる、勉学修業でわたってきた日本の仏教界の歴史ある宗派の開祖となった僧侶の足跡などをあらわす故事伝説の場所も多く存在する。また、すでにその頃から日中間の貿易取引の商船も発着する港ともなり、東アジアでその存在が大きく知られるようになっていたのである。遣唐使は公式な外交使節として日中国際交流の役目を果たしたが、その後室町時代に足利将軍による遣明使節が派遣されたが、これも正式な外交使節であった。時代の流れの中における

それ以外の交流は全て民間交流であったので、勉学修業に来た僧侶や商人は、必ずしも都まで行くことはなく、中国の沿岸地方の町で目的を果たし日本に帰国するケースが多くなっていった。この様な状況の中で文化交流が高まっていった背景がある。

そこで寧波および地理的にその周辺は日中文化交流の中で意義ある地域であったのである。古代の日本においては、外国からの脅威や侵略は無かったので、特に外交使節としての遣隋使や遣唐使の主なる目的は文化交流が中心であった。更にその後の日中間の交流も大別すると学問文化の吸収と貿易の2本立てであった。ここでその玄関口としての役割を荷ってきた寧波（明州）に関連した人々、留学僧、僧侶について検証してみよう。

Ⅴ．寧波に関連した人達

１．鑑真　がんじん（688～763年）

唐の高僧で日本における律宗の開祖となった。平城京（710～784年）において日本での仏教は盛んになっていった。しかし、僧になるためには授戒（じゅかい）（仏門に入る者に仏教の戒律を授けること）を受けることが必要であるが、当時の日本では正式に授戒を行える授戒伝律の名師がいなかったので、聖武（しょうむ）天皇の要請により、栄叡（ようえい）と普照（ふしょう）の二名の奈良の興福寺の僧が733年の遣唐使船に乗り授戒の師にふさわしい真正の師を招聘するために入唐した。742年に唐の宝といわれた名高い大名寺の鑑真に会い来日を懇願した。日本へ行くことを決意した鑑真は、5回の渡航に失敗し、失明するなど多くの艱難辛苦を乗り越えて6回目に現在の鹿児島県坊津に753年に到着し、来日を果たした。翌754年に入京し東大寺にて戒壇を設け、時の孝謙天皇、聖武上皇や多くの僧侶が授戒を受けた。その後759年に唐招提寺（とうしょうだいじ）が建立され入寂（死去）する763年まで仏教の戒律の教導を行った。鑑真は仏教のみならず医学、建

築などの分野も教えたといわれている。

鑑真は 3 回目の日本への渡航が嵐によって失敗した際に明州（寧波）定海県の小島に流された。そこで島の漁師に助けられた後、明州太守（長官）が救助に来て一行を、寧波市東方 16km にある名刹阿育王寺（あいくおうじ）に迎えた。鑑真一行の阿育王寺に滞在している情報はただちに各地に広まり、各方面から授戒を受けたい僧侶が沢山集まったという。鑑真一行は同寺に 2 年間滞在した。彼を迎える為に日本から来ていた栄叡と普照もこの寺に初めての日本人として鑑真に付き添って滞在した。後に栄叡は唐で病死するが普照は日本に戻り東大寺所属の高僧として活躍した。鑑真は、余りにも崇高な当代随一の名僧であったため玄宗皇帝は彼の渡航を認めなく禁止していた。その為彼の日本行きは密行というかたちがとられた。阿育王寺に来た僧侶達が、鑑真が唐土を離れることを阻止しようとした妨害も沢山あったが、鑑真の渡日の決心は増々固まっていった。6 回目に成功した際の船は後述の遣唐大使藤原清河の帰国遣唐使船団の第 2 船であり、鑑真は以前にも清河と阿倍仲麻呂から日本への渡航を強く薦められていた経緯を考えると、何かの因縁的なものを感じる。いずれにしてもこの船団は明州（寧波）港を出港していったのである。

２．阿倍仲麻呂　あべのなかまろ（698 ～ 770 年）

717 年に派遣された遣唐使に従って、20 歳で留学生として唐に渡る。その時の大使は大伴山守（おおとものやまもり）で仲麻呂は多治比広成（たじひろなり）、玄昉（げんぼう）、吉備真備（きびのまきび）らと一緒だった。遣唐使船は 4 隻で総勢 557 名という史上初の大使節団として渡った。その船には本稿の最後に登場する留学生井真成も乗っていたと思われる。唐の都西安で太学に入り科挙の試験に合格した後、司経局の校書として仕官し、玄宗皇帝に仕えた。その後も昇進を重ね、従三位である秘書監兼衛尉卿という皇帝の直近かに仕える高官となった。仲麻呂は、李白（りはく）、王維（おうい）、趙曄（ちょうか）、儲光義（ちょこうぎ）な

どの詩人達とも深く交流し唐の中でも高名な文人としての存在となっていった。玄宗皇帝は、仲麻呂を高く評価していたため、なかなか帰国を許さなかった。753 年に前年に入唐していた遣唐大使藤原清河が日本に帰国する際に仲麻呂の帰国も許された。同年 11 月 15 日に、明州から出発する際に、満月の夜に中国の友人達が開いてくれた惜別の宴で詠んだ歌がかの有名な「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」である。残念ながら仲麻呂と清河の船はベトナムに漂着し、苦労して長安に戻るが、仲麻呂は日本に帰国することはなく、名前も朝衡（ちょうこう）と改め、官位も上り、さらに粛宗、代宗の両皇帝に仕え在唐 54 年の生涯を唐の都長安で閉じた。

３．最澄　さいちょう（767 ～ 822 年）

日本天台宗の開祖。最澄は近江国（滋賀県）で生まれた。先祖は帰化人ともいわれている。12 歳で近江国分寺にて修行をはじめ、14 歳で得度し、最澄という法名を授かった。19 歳で、東大寺で受戒したのち比叡山に庵を構え、鑑真が唐から持参した天台宗教典を基本に研鑽を積んだ。最澄は中国天台宗の総本山である天台山を訪ねたい由を願い出て、802 年、桓武天皇からの入唐の許可を受け、勅命により平安遷都後、最初の遣唐使（804 年の延暦の遣唐使）に随行することになった。この時の随員の中には空海（弘法大師、真言宗の開祖　774 ～ 835 年）もいた。最澄は短期間の就学滞在で帰国する還学僧の身分であり 38 歳だった。一方空海は 31 歳で長期間滞在する留学僧の身分であった。大使藤原葛野麻呂（かどのまろ）が率いるこの遣唐使節団は 4 隻にて一路大陸に向かったが、海上で暴風雨にあい船団はバラバラになり 2 隻は行方不明になった。副使石川道益（みちます）の第 2 船に乗っていた最澄の船は一か月以上の漂流の末に明州に到着した。石川はその地で病没するが一行は都長安に向かった。大使藤原葛野麻呂が乗った第 1 船には空海が乗っていた。この船は福建省に

漂着し、そののち、空海は都長安に達して、密教の秘法を伝授され 2 年後には帰国し、真言宗の開祖となった。大使は 805 年に、唐で 8 ヶ月間滞在した最澄らを伴い明州から無事に帰国した。さて、最澄であるが、中国天台宗の聖地である天台山が明州に近い台州にあると知り、長安に向かった一行と別れ天台山を訪れることを申請した。明州の知事は 804 年 9 月 12 日付けの台州への通行証を発行してくれ、沿道の便宜等をはかってくれた。台州から明州に戻る際に台州知事も 805 年 2 月 2 日付けの通行証を発給してくれている。この 2 通の通行証は最澄が開山した比叡山延暦寺に秘蔵されている。天台山に登った最澄は聖地といわれる仏隴寺（ぶつろうじ）の座主行満（ぎょうまん）や国清寺（こくせいじ）の道邃（どうすい）などの高僧から智者大師智顗（ちしゃだいしちぎ）が開いた天台宗の奥義を学びその教えを伝授された。初めて最澄を接見した際に行満は不思議と涙を流した。行満は開祖智顗大師の遺言にあった 200 年後に東の国に生まれ変わって天台教義を隆盛にすることになるとの予言を、207 年目に東の国日本から来た最澄に大師の転生を重ねて観たのである。最澄の礼儀正しい態度、立ち振る舞い、その端正な風貌、修学への熱意などを思い大師の生まれ変わりと信じていたようだ（行満の送別の詩に表現されている）。天台山の国清寺は、日本の天台宗の原点とされ、境内には最澄伝教大師の石碑が建立されており、肖像画も掲げられ現在でも密接な交流が行われている。天台山で修業したあと、明州に戻ったが帰国の遣唐使船はしばらく出港できなかった。そこで最澄は、天台山で密教を学ぶことも目的の一つとしていたこともあり、近くの越州（紹興市（しょうこう））に密教を教えてくれる龍興寺という寺があることを知り、同寺を訪ね 10 日間程滞在し密教の教典を筆写した。このため、のちに帰国した最澄は、当時最先端とされていた密教の専門家としても扱われた。これはのちに正統な密教を学んで帰国してきた空海と対立する原因となった。明州から日本に帰国した最澄は比叡山を本山に日本天台宗を設立し、この宗派の開祖となった。819 年に比叡山に大乗戒壇の建立を申請したが、宗教上の反対派の為に許されず、822

年に 55 歳で入寂（死去）後 7 日目に建立が勅許された。比叡山本寺も延暦寺と称され、866 年に日本最初の大師号である伝教大師の号を贈られた。

４．栄西　えいさい（1141 ～ 1215 年）

備中（岡山県）の吉備津神社の神官の子。日本臨済宗の開祖。ようさいともいう。13 歳で最澄が開いた比叡山に登り天台宗の教義を学んだが、満足せず 27 歳で伯耆の国（鳥取県）の大山寺で基好上人のもとで天台密教をさらに修業し叡山に戻った際に、これまで持っていた入宋の意思を固めた。その背景には延暦寺の天台座主の座をめぐり紛争が起こり、山内の東塔と西塔の僧同士が血をもって大乱闘をするなど宗教界の退廃ぶりに原因があった。伝教大師最澄が修業した宋の天台山の正法に触れてみたいとの思いが強まり、翌年 28 歳の時に博多から宋船に乗り東シナ海を渡り舟山群島から明州に入港した。天台山を巡礼し国清寺参りから明州に戻り、阿育王寺を訪ね仏舎利塔を参拝した。さらに当時の南宋の都である臨安（りんあん）（杭州市）を訪れた時に、茶を飲む習慣が大流行していたことを知り、産地を訪れて種を手に入れた。これが後に日本の茶栽培のもととなった。各地を巡る間に江南地方に臨済宗が説く禅仏教が盛んに行われていることに感銘した栄西は滞在が 6 ヶ月間であったが諸般の事情により明州から帰国した。19 年後に再び明州より天台山に登り万年寺の臨済宗虚庵懐敞（きあんえじょう）のもとで 4 年間禅の修業を行った。その後、虚庵懐敞大師が勅命により明州の天童寺に移る時に栄西も従い、2 年後に師から禅修業の総括として臨済宗の印可状と法衣である袈裟を伝授された。51 歳であった。ある時栄西は師の虚庵懐敞大師が天童寺の千仏閣再建事業を考えていることを知り、帰国後に日本からの良い材木の送付を約束した。帰国後 2 年余りにわたり巨木を輸送し続け 3 年後に師の事業が完成した。師が感激したことはいうまでもないが、当時三江口の埠頭では大喜びした市

民が木材の陸揚げを行いお祭り騒ぎだったという。彼の抜きん出た禅の修業は高く評価され、南宋の都臨安（杭州市）で皇帝孝宗の接見が許され「千光法師」の称号が贈られた。1191 年の 7 月に栄西は明州港から帰国し、京都の建仁寺を建立し、また、鎌倉の福寿寺、博多の聖福寺も建てるなど 75 歳で亡くなるまで臨済禅の普及に努め日本臨済宗の開祖となった。栄西は禅の他にも『喫茶養生記』を著すなど本格的に茶の栽培から喫茶の習慣までを日本で広めた。また、栄西は中国の寺院の建築様式を日本にもたらしたことでも有名である。

５．道元　どうげん（1200 ～ 1253 年）

日本曹洞宗の開祖。父は久我通親、母は九条基房の娘で京都に生まれる。名門公家の出とされる。幼少時代に両親を失い、14 歳で比叡山延暦寺座主公円について髪を剃って得度し出家した。18 歳で栄西が建てた建仁寺に入った。道元が同寺に来た時は、栄西は 2 年前に亡くなっており、その為彼は栄西の高弟であった明全（みょうぜん）に師持し 22 歳で臨済宗の印可を受けた。道元は明全の教えを通して栄西の禅風を学び、入宋求法（宋に渡り直接仏法を修業により求めること）の願望を持ち修業にはげんだ。24 歳で師明全と共に入宋の途に就き、明州に到着した。道元は明州の港の入国手続きのため船内で暮らしていた時に感動的な体験をしたという。船に阿育王寺の典座（食事係）を務める老僧が日本産の干し椎茸を買いに来た。日本産のものは香り高く貿易品として有名だった。端午の節句なので修行僧たちに麺をごちそうする味付けに買いたいとのことだった。道元は茶をすすめてもてなし話を聞くと、老僧は故郷を離れて 40 年、年令は 61 歳。20km の行程を歩いてきたので泊っていけと勧めた。すると典座は明日の食事はどうしても自分が作らなければならないので帰るという。道元は「阿育王寺のような有名な寺なら他に作っ

てくれる人がいるでしょう。あなたは立派な年令であるので坐禅修業したり古人の語録を読んだりされないのですか。それをしないで何故典座職などに専念されるのですか。」と問うた。すると老典座は「外国の若いお坊さん、あなたは修行の何たるかを知らないようだ。文字の何たるかも知らないようだ。いつか阿育王寺にたずねてきなさい。」道元は、はっとすると共に自分の言動を慚（は）じた。のちにその典座が、道元が天童寺に入山したのを聞き、典座を辞し故郷に帰る前に会いにきたのである。その時に色々な話をしてくれた。特に料理や雑務の中にも学問や修行があり禅の道があることを教えられた。天童寺でも別の老典座が海藻を干していた時の会話の中にも道元は深く教えられるところがあり、2 名の老典座が行動で示してくれた教えに道元は日本では体験できなかった禅の息吹を肌で感じたのである。道元は「山僧（自分道元のこと）いささか文字を知り、弁道を了ずることは、すなわち彼の典座の大恩なり。」と後に『典座教訓（てんざきょうくん）』に記している。日本ではすでに万巻の経典や書物を読んでいたにも関わらず道元には、まだ悟りには至らなかった頃のエピソードである。道元と明全は、栄西が帰国してから 32 年目にあたる 1223 年 7 月に明州の天童寺を訪れた。道元は同寺の住持無際了派（むさいりょうは）について禅宗を学んだ。その後、諸山巡歴の旅に出て、阿育王寺、杭州の径山万寿寺、天台山平田万年寺などを訪ねて再び天童寺に戻ったあと、住職になっていた曹洞宗の師如浄（にょじょう）禅師のもとで修業にはげんだ。道元は臨済禅よりも、地味ではあるが、人間性の奥底にある真理を求める曹洞禅を師如浄のもとで参禅に励んだ。1225 年、道元は大悟徹底の境地を会得したという。厳しい修業の末、道元は曹洞禅を修得し、1227 年に師如浄に別れを告げ天童寺を辞し 7 月中旬前に明州を出航し、肥後（熊本県）川尻に着岸し帰国を果たした。その間若年からの師の明全は 1225 年 5 月に天童寺の寮で亡くなった。死期を悟った明全は衣裳をととのえ坐禅したまま 42 歳の生涯を閉じた。道元は遺骨を日本に持ちかえった。現在、建仁寺にある明全の墓に納められている。

天童寺の師如浄は道元が明州港から出航したあとの同じ月の 7 月 17 日に入寂（死去）した。道元はそのことを知る由もない。道元への如浄から帰国にあたり授けられた法衣、宝鏡、如浄の肖像画、数珠、鉢などの品々はその時点で師の遺品となった。

日本に帰国した道元は、「都市に住んだり国王大臣に近づくことなく深山幽谷に住み、真の仏教を伝えるべし」という師の教えの通り、1244 年越前（福井県）に吉祥山永平寺を建立し、日本曹洞宗の開祖となった。『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』、『普勧坐禅儀（ふかんざぜんぎ）』、『永平清規（えいへいしんぎ）』など一般市民に坐禅を勧める著書を著わし禅の普及に生涯を捧げた。道元による曹洞禅の真髄を表したことば「只管打坐（しかんだざ）（ひたすら坐禅すること）」は特に有名である。

6．雪舟　せっしゅう（1420 ～ 1506 年）

室町時代の禅僧、水墨画家。名を雪舟等楊という。幼少時に出家し 11 歳で上京して相国寺に入り禅宗の修業に入る。相国寺が所蔵する唐、宋、元の絵画作品の影響により絵画の魅力にとりつかれる。若い頃から画才があり、相国寺の画僧で当代随一といわれた将軍家の御用絵師である周文（しゅうぶん）から絵を学んだ。30 代半ば頃より画僧として知られるようになる。1467 年に室町幕府の遣明使節団の一員として遣明船に乗り入明し寧波に上陸する。天童寺を訪れた際に風光明媚な環境に魅了され、大使一行と別れて一人止まり禅修業を行うことを許される。雪舟は参禅のかたわら絵の創作活動を行い天童寺の僧達とも深く交流し、尊敬を受け「天童第一座」の尊称を与えられた。のち大使一行を追って北京に至り、礼部院中堂の壁画「天開図画楼記」を制作し、公的に絶大な評価を得た。その他作品としては明に滞在する間に「寧波港図」、「育王寺図」、「四季山水図」などを描き、1469 年に寧波から出航して帰国した。日本に戻ってからは山口に本拠として雲谷庵を構え、87 歳で亡くなるまで

各地を創作活動で訪れた。禅僧雪舟は明に滞在中多くの詩人、文人と交流を持った。それにもまして彼は天童寺の周辺や寧波の美しい風景を愛し名所旧跡を訪ね、画家としての部分を満喫したのではないだろうか。

以上、日本人の中で特に寧波に関連のあった人々を挙げてみた。文中にも出てきたが、ここで彼らが関わった寧波周辺の寺を紹介しよう。

Ⅵ．日本と関係の深い寺

１．阿育王寺　あいくおうじ

寧波市の東方約 16km の太白山脈に位置し、中華五山（径山寺（けいさんじ）、霊隠寺（れいいんじ）、浄慈寺（じょうじじ）、天童寺、阿育王寺）の一つ。282 年に西晋の劉薩訶が舎利塔を創建したとの伝説がある。東晋時代の 405 年に舎利塔の上に屋根が、さらに寺が建てられ、522 年、梁の武帝の時代に仏殿や楼閣が造られ「阿育王寺」の名称を賜った。寺の命名の発音が、紀元前 7 世紀の周の時代に、インドのマウリア朝のアショーカ王からきている。同王が建立した 8 万 4 千基の仏塔の一つとして信仰されているのだ。この寺では唐・宋の時代に日本からの多くの僧が学んだり訪問しており、殊に鑑真が日本に行く前に滞在していたことで有名。寺の面積は 80,000m^2。建物も古い建築様式の立派なたたずまいを持っており、保存状態が優れた遺跡も多くあり歴史を感じさせる名刹である。

２．天童寺　てんどうじ

寧波市から東方 30km の太白山にある禅宗の寺である。300 年、西晋の時代に義興という僧が東谷に庵を結んだのがはじまりという。建てる時に天から童子が降りてきて建物造りを手伝ってくれたのが天童寺という名称の由来である。757 年、唐の時代に宗弼禅師が、東谷から寺院を移してきたのが現

在の天童寺である。面積は 76,400m^2 で寺の各殿堂、楼閣は 30 以上あり部屋もかつては 999 室もあったが現在は 4 分の 3 の部屋数だ。堂内には道元禅師の肖像画と石碑がある。道元は 23 歳から 4 年間天童寺を中心に禅修業に励み悟りを開いた。道元は帰国後この天童寺をモデルに永平寺を建立したのだろう。筆者は永平寺を訪れた時に、日中の建築様式、屋根のかたち、各堂の壁の色彩などの違いはあるが、全体のたたずまいの中に天童寺の原型が、彷彿と沸き上ってくる感動を覚えたことがある。日本の曹洞宗派では天童寺を本山としている。栄西や道元、明全、その他にも多くの日本の僧侶が天童寺を訪れているが、逆に天童寺からも多くの高僧が日本に派遣されている。道元の師であった如浄禅師の弟子である寂円（じゃくえん）は 1226 年に来日し越前（福井県）の大野にて宝慶寺を建立。天童寺で修行していた臨済禅の高僧であった蘭渓道隆（らんけいどうりゅう）は、南宋の仏教に不安をいだき、1246 年に日本に渡った。その名声により鎌倉幕府の執権北条時頼の招きで、鎌倉で建長寺を建て開山となった。厳格な臨済宗の禅を正しく伝え、死後亀山天皇から大覚禅師の称号を贈られた。無学祖元（むがくそげん）は 1226 年に慶元府（明州）で貴族の家に生まれ、臨安（杭州）の浄慧寺で出家し、各地の寺で禅を修めた。その後、天童寺の首座を勤めていたときに、北条時宗の招きで、1279 年に日本に渡った。時宗は円覚寺を創建し、無学祖元を開山とした。北条一門や鎌倉武士の教化に専念し、アドバイザーの役目を果たした。死後、仏光国師、さらに光厳天皇からは円満常照国師の称号を贈られた。この他にも天童寺主座であった明極（めいきょく）など日本に関係の深い僧侶が多数存在するが、それだけ寧波市にある太白山天童寺は日本となじみが深い寺である。

３．普陀山　ふださん

寧波の外海からの波よけといわれている舟山群島の中の舟山島の東 5km にある、面積 12.8km2 の小島。観音信仰の霊地で中国の仏教四大霊山（山西省五台山、四川省峨眉山、安徽省九華山）の一つである。島名もインド南海岸にある観音菩薩が住んでいたとされる Potalaka に由来し普陀洛迦（ふだらく）、補怛洛迦（ふだらく）、宝陀羅（ほたら）などと当て字が使われた。普陀山も沖合の洛迦山（らくさん）という小島と合わせて普陀洛迦山と呼ばれている。伝説では天竺僧が岩窟で修業したことが始まりで普陀洛迦の命名が行われた。伝えでは日本僧がここでの観音信仰に大きく関連する。

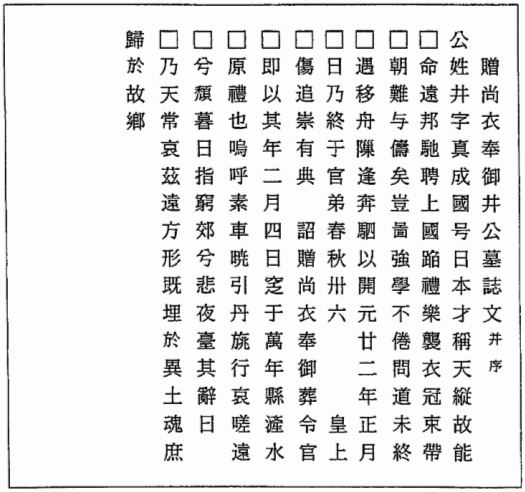
916 年に五台山で修業を終え、持ち帰りを許された観音像を胸に抱いて天台山に登り、さらにそれを日本に持ち帰ろうと明州から出航した日本僧慧萼（えがく）の船が普陀山にさしかかると突然海中から数百の鉄の蓮の花が現れ、船が立ち往生してしまった。慧萼は観音様が中国を離れたがらないのだろうと思い、帰国を断念し、島に庵を建て観音像を安置し、この地に留まった。この話は伝説である部分が多いが、唐の時代に慧萼が帰国途中嵐に遭遇し普陀山に観音院を建立したのは史実であり、庶民の観音信仰はこの話により一層高まったという。島には普済寺（ふさいじ）、法雨寺（ほううじ）、慧済寺（えさいじ）を中心に多くの寺院が並ぶ。道元をはじめ多くの日本僧が訪れている。普陀山信仰はここから日本にも伝わっており、各地にその名称が残っている。例えば、和歌山県那智勝浦町の補陀洛山寺。また栃木県の日光山は補陀洛信仰の霊場となっており、当て字で二荒山（ふたらさん）と表され、それが「にこうさん」、「日光山」と変化する。

４．天台山　てんだいさん

寧波市、紹興市にかけての山地。寧波市からは南へ 100km 程の距離。575 年に智顗（ちぎ）が入山して 10 年間修業し天台宗の根本道場を創設した。のちに彼は隋の二代皇帝煬帝（ようだい）から智者という称号を贈られ智者大師として知られている。煬帝が建立した天台宗の総本山である国清寺（国清講寺ともいう）、その他、高明寺、華頂寺、方広寺、萬年禅寺などの寺があり歴史の重みを感じさせる古刹が多い。寧波にも近いこと、また平安時代の仏教が天台宗であったのでその聖地としての天台山は、遣唐使の頃からの留学僧や還学僧など僧侶を中心とした仏教関係者が数多く訪問し、学問修業や、教義の研究など歴史的にも日中交流の重要な場所であった。

Ⅶ．歴史の中に埋もれた井真成

2004 年 9 月に唐の都（長安）であった西安市の東郊外から日本人留学生の墓誌が土地開発の最中偶然発見されたとのニュースがあった。中国の西北大学の王建新教授により同 10 月に公表された。墓誌は死者の姓名、没年、経歴などを石板や銅板に刻銘したものである。発見されたものは漢白玉質という大理石に似た白色の石で一辺 39.5cm の正方形で厚さ 10cm の石板に一行 16 字詰め、12 行にわたって文字が刻まれている。大きさや形式は唐の時代に作られた完全な中国式の墓誌であった。現在、西北大学歴史博物館に陳列されている。


贈尚衣奉御井公墓誌文并序
公姓井字真成國号日本才稱天縦故能
□命遠邦馳聘上國蹈禮樂襲衣冠束帯
□朝難与儔矣豈量強學不倦問道未終
□遇移舟隙逢奔駟以開元廿二年正月
□日乃終于官弟春秋卅六皇上
□傷追崇有典詔贈尚衣奉御葬令官
□即以其年二月四日窆于萬年縣滻水
□原禮也嗚呼素車暁引丹旐行哀嗟遠
□兮頽暮日指窮郊兮悲夜臺其辭日
□乃天常哀茲遠方形既埋於異土魂庶
歸於故郷

奈良大学東野治之教授の「遣唐使」岩波新書、2007 年（3 ～ 7 頁）に載っている墓誌の原文、書き下し文と現代語訳文を以下引用する。書き下し文と現代語訳文は横書きにした。

〔書き下し文〕

贈尚衣奉御井公の墓誌の文　序并せたり。

公は姓は井、字は真成。国は日本と号し、才は天の縦せるに称う。故に能く命を遠邦に銜み、上国に馳せ騁えり。礼楽を蹈みて、衣冠を襲う。束帯して朝に□ば、与に儔うこと難し。豈図らんや、学に強めて倦まず、道を問うこと未だ終らざるに、□移舟に遇い、隙、奔駟に逢わんとは。開元二十二年正月□日、乃ち官弟（弟）に終わる。春秋三十六。皇上、□傷みて、追崇するに典あり、詔して尚衣奉御を贈り、葬は官を令て□せしむ。即ち其の年二月四日を以て、万年県の滻水の東の原に窆る。礼なり。嗚呼、素車、暁に引き、丹旐、哀を行う。遠□を嗟きて暮日に頽れ、窮郊に指きて夜台に悲しむ。其

の辞に曰わく、寂（こえな）きは乃ち天常（てんじょう）、哀（かな）しきは茲（こ）れ遠方なること。形は既に異土に埋もれ、魂は故郷に帰らんことを庶（こいねが）う。

〔現代語訳文〕

尚衣奉御を追贈された井公の墓誌の文 序と并せる。

公は姓は井、通称は真成。国は日本といい、才は生まれながらに優れていた。それで命を受けて遠国へ派遣され、中国に馬を走らせ訪れた。中国の礼儀教養を身につけ、中国の風俗に同化した。正装して朝廷に立ったなら、並ぶものはなかったに違いない。だから誰が予想しただろう、よく勉学し、まだそれを成し遂げないのに、思いもかけず突然に死ぬとは。開元二十二年（七三四、天平六年）正月□日に官舎で亡くなった。 年齢は三十六だった。皇帝（玄宗）はこれを傷み、しきたりに則って栄誉を称え、詔勅によって尚衣奉御の官職を贈り、葬儀は官でとり行わせた。その年二月四日に万年県の滻河の東の原に葬った。礼に基づいてである。ああ、夜明けに柩をのせた素木（しらき）の車を引いてゆき、葬列は赤いのぼりを立てて哀悼の意を表した。真成は、遠い国にいることをなげきながら、夕暮れに倒れ、荒れはてた郊外におもむいて、墓で悲しんでいる。その言葉にいうには、「死ぬことは天の常道だが、哀しいのは遠方であることだ。身体はもう異国に埋められたが、魂は故郷に帰ることを願っている」と。

以上の□の箇所は削れており解読不明の部分である。

墓誌の内容は以下の通りである。(1) 墓の主は姓を井、名は真成（しんせい、まなり）と称した。(2) 日本国で生まれた日本人であった。日本と表示されているものでは最古のものである。(3) 才能が高く、命令により唐に来た。遣唐使の一員だったのだろう。(4) 勉学を修めることに日々努力した青年である。(5) 開元 22 年（734 年）正月□日官舎で逝去した。(6) 享年 36 歳だっ

た。(7) 玄宗皇帝はこれを哀れんで尚衣奉御の位を追贈した。この位は皇帝の依服を管理し皇族などが側近として任じられるものであり、普通では得られない官職。生前皇帝が特に親しくしていたことが伺える。(8) 葬儀も官給とされた。(9) 同年 2 月 4 日に萬年県滻水の□原に、礼にのっとり手厚く埋葬された。

井真成の生年は逆算してみると 699 年であり、入唐時は 19 歳で第 9 次遣唐使節団の一員だったことは、ほぼ間違いない。同使節団は 717 年 3 月に難波津から出発し、瀬戸内海を通り博多津を経由して五島列島を最後に、東シナ海を渡る南路というコースがとられた。南路は長江河口から明州（寧波）のあたりの範囲に着岸した。この使節団はどこに着岸したかは記録にないが（筆者は明州ではないかと思っている）、一行は同年 10 月に長安に達している。

人数は 557 名でありそれまでにない大使節団であった。井は唐風の姓であり、諸研究資料を見ると現在の大阪府藤井寺市周辺に多い、井上、葛井（ふじい）という氏族の出身者ではないかとの説が多い。いずれにしても彼の名前は、日本側、唐側の記録には載っていない。それが今回の発見により、死後 1270 年の時空を経てその存在に光が当てられたのだ。状況証拠としては、第 9 次使節団には、玄昉（げんぼう）、阿倍仲麻呂、吉備真備（きびのまきび）などの留学生が入っており、井真成も彼らと共に渡ったことは間違いない。玄昉は、日本の貴族の出で留学中、優れた成績を修め 5,000 巻あまりの仏教経典と仏像を伴って帰国し、聖武天皇に重く用いられ、これにより当時の日本の仏教は空前の発展を見た。玄宗皇帝は三品（位階三位）に相当する紫の袈裟を贈っている。吉備真備も貴族の出身で、留学から帰国する時に大量の書籍を持ち帰った。その中には天文学、暦学の本も多く、さらに楽器、機具、武器なども持ち帰った。玄昉と共に聖武天皇に重用された。彼は井真成よりも 4 歳年長である。阿倍仲麻呂は前述したが、698 年に奈良で阿倍船守の子として生まれているので、井真成よりも 1 歳年上である。20 歳で選ばれて第 9 次遣唐使節団の一員として

唐に渡った。従って井真成はこれらの名が内外で知られていた人達とほぼ同じ年代の人物である。当然長安では交流があったであろうし、もし元気だったならば 733 年に日本から出発した第 10 次遣唐使船の帰り船で一緒に帰国できたのである。この第 10 次遣唐大使多治比広成について玄昉、吉備真備、阿倍仲麻呂らは 17 年間の留学を終えて、明州から帰国の途に就いた。玄昉と真備は無事帰国できたが、阿倍仲麻呂が乗った船は帰国できず漂流し彼は唐に戻り高官として死ぬまで唐王朝に仕えたことは有名である。もし井真成が生存していたならば彼も連れて帰国したであろう第 10 次遣唐使節団は 733 年の秋に長安に入京したものと考えられている。正月に急逝した真成も到着当時の遣唐使らとは再会を果たしていたであろう。また、遣唐使節団の人々も彼の葬儀の日である 2 月 4 日に参列したことは想像できる。記録によると遣唐使は 2 月 7 日まで長安に滞在していたからである。

Ⅷ. 礼節と国際人

森克己著『遣唐使』至文堂、1990 年によれば、「遣唐使人は、好学の士であり、ことに注目すべきは容貌、風采、動作、態度などを選考の条件にしていた」とあり、やはり選ばれた人が唐に渡ったことが伺える。浙江大学王勇教授 日本文化研究所長の著書『中国史の中の日本像』農山漁村文化協会、2000 年（136 頁）を以下引用する。史実によれば（続日本紀）、第 8 次遣唐使を務めた粟田真人（あわたのまひと）一行が 702 年 6 月に筑紫を発って 10 月に楚州の塩城県に吹きよせられ、地元の唐人と問答を交わしたとき、唐人は日本使だと知り使者らの「儀容」をみて、「さすが君子の国だ」と感嘆したことが遣唐使らの帰国報国に載せられている。「聞くところによれば海東に大倭国という国があり、これを君子国といい、人民は豊楽にして礼儀は敦（あつ）く行われているという。」自らの報告であるが、それを裏付ける記録が中国側の文献にも載っ

ている（『旧唐書』日本伝、『新唐書』日本伝など）。総合すると、当時から日本人は礼儀正しい、端正な容姿のものが多くという人物像が出来上がるが、特に外交使節にはそういう印象の人達を選んだのであろう。

さらに王勇氏の著書の 135、136 頁によれば、『延暦僧録』には 752 年出発の大使藤原清河をはじめとする第 12 次遣唐使節団が、明州に着岸し、長安で玄宗皇帝にまみえた際の情景を次のように活写している。「使は長安に至り、塵を払わずして拝朝する。皇帝は、かの国に賢い主君がいる。その使臣を観れば礼儀正しい振る舞いが他国と異なる」と讃えて、すなわち日本に「有義礼儀君子国」という称号を与えたとある。さらに唐の文人と広く交流のあった阿倍仲麻呂は儲光義の贈答詩に「美無度」と称されている。これは「美度(はか)る無し」と読むがその意味は美の極致を言い表しており、仲麻呂が美貌の持ち主だったことがわかる。

井真成は学問を修め、一留学生の身分であったにもかかわらず、玄宗皇帝がその死を悲しみ、また墓誌に「魂は故郷に帰らんことを庶(こいねが)う」と刻銘させていることを考えると、当時長安には各国からの留学生が沢山来ていたにもかかわらず、最高権力者の皇帝が彼自身のことをよく知っており、人間的にも立派な人格を有していたことが推量される。さらに墓誌の内容をみると、「唐王朝で礼儀を習い、衣冠を襲ねて比べる者がいないほど優秀な人材になった」とある。本人は 17 年間異国で修学していたために唐の言語、文化、慣習、価値観などを充分に会得していたことが証明されている。しかも日本人というアイデンティティを失わずに持ち続けていたということは、いわゆる真の「国際人」であったことが証明されているということがいえよう。

Ⅸ. まとめ

遣唐使の時代に使節団として中国に渡った人々は総計で 5,000 人強といわれている。本稿では寧波市である当時の明州を入港・出港していった代表的な人物を取り挙げ、同市が如何に日中国際交流の玄関口の都市として重要な存在であったかを検証してみた。

難破、漂流などの危険にもかかわらず、沢山の人々を送った日本と、彼等を温かく受け入れてくれた歴代王朝、各仏教寺院、高僧、名僧達のことを考えると日本は実に多くのことを中国から学んだのである。

また中国の歴史的な記録の中に、日本は「礼儀正しい国である」という記述が多かった。それらは現地に行っていた人達から受けた印象が大きく作用したのであろう。2011 年の東日本大震災の時に、外国のメディアからは、震災で日本人は家族を亡くされた方が多いにもかかわらず､列に整然と並び、礼儀正しく、また忍耐強い強力な団結を示してきたと称賛された。日本人が持つ「礼儀正しさ」は、歴史と伝統の中で永年に亘り培われてきたものであることを実感した。

最後に寧波料理についての私見を述べる｡海鮮や野菜を中心とした醤油味、塩味のさっぱり型の日本人好みの料理である。生の小さな巻貝や二枚貝の醤油漬けは中国では珍しい。永い交流の中で使節団や留学僧達が持ち帰った味が広まり、逆に我々の味となったのかもしれない。

本稿を書くにあたり、寧波大学の情報について、副学長赵伐教授、外語学院副院長・日本研究所所長張正軍教授に大変お世話になった。日中友好相互理解を祈念して感謝の念を表したい。

参考文献

安藤更生『鑑真大和上伝之研究』平凡社、1960 年
王勇『唐から見た遣唐使』講談社、1998 年
王勇『中国史の中の日本像』農山漁村文化協会、2000 年
小島毅『海からみた歴史と伝統』勉誠出版、2006 年
斎藤忠『中国天台山諸寺院の研究』第一書房、1998 年
佐伯有清『最後の遣唐使』講談社、1978 年
佐伯有清『悲運の遣唐僧』吉川弘文館、1990 年
妹尾達彦『長安の都市計画』講談社、2001 年
専修大学･西北大学共同プロジェクト『遣唐使の見た中国と日本』朝日選書、2005 年
竹内道雄『道元』吉川弘文館、1992 年
田中史生『越境の古代史』ちくま新書、2009 年
東野治之『遣唐使船　東アジアのなかで』朝日選書、1999 年
東野治之『遣唐使』岩波新書、2007 年
藤田友治『遣唐使・井真成の墓誌』ミネルヴァ書房、2006 年
古瀬奈津子『遣唐使の見た中国』歴史文化ライブラリー　吉川弘文館、2003 年
宮脇隆平『栄西　千光祖師の生涯』禅文化研究所、2000 年
森克己『遣唐使』至文堂、1955 年
山口修『日中交渉史』東方選書、1996 年
頼富本宏『日中を結んだ仏教僧』農山漁村文化協会、2009 年
孙农斋『浙江省実用地図册』成都地図出版社・浙江人民出版社、1998 年
总参謀部測絵局編『中華人民共和国地図集』星球地図出版社、2000 年

関連新聞記事等

「遣唐使の墓誌発見」『朝日新聞』全国版 2004 年 10 月 11 日

「井真成は楊貴妃に会えた？」『週刊朝日』2004 年 10 月 29 日号
「井真成ってどんな人」『朝日新聞』関西版 2004 年 11 月 2 日
「『井真成』に迫る 中国・西北大学教授 王建新さん」『朝日新聞』全国版 2005 年 2 月 5 日
「謎深まる『井真成』の実像」『毎日新聞』2005 年 3 月 11 日
「井真成ニュース」NHK　10 分　2005 年 3 月 15 日
「遣唐留学生の墓誌初公開」『共同通信』2005 年 3 月 25 日
「『井真成』帰る」『産経新聞』全国版 2005 年 5 月 17 日
「おかえり　井真成さん」『毎日新聞』全国版 2005 年 9 月 17 日
「『井真成』の魂よやすらかに眠れ」『産経新聞』関西版 2005 年 12 月 5 日
「井真成の『魂』追悼」『朝日新聞』関西版 2005 年 12 月 5 日
http://www.nbu.edu.cn/english/ca/index.html
http://www.nbu.edu.cn/english/Research/staff.html
http://www.nbu.edu.cn/lishi/
http://www.nbu.edu.cn/english/profile/index.html
http://www.nbu.edu.cn/gaikuang/